氏名	YOLA GLOAGUEN（ヨラ　グロアゲン）
学位(専攻分野)	博士（工学）
学位記番号	工博第2913号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工学研究科建築学専攻
学位論文題目	TOWARDS A DEFINITION OF ANTONIN RAYMOND'S "ARCHITECTURAL IDENTITY" －A STUDY BASED ON THE ARCHITECT'S WAY OF THINKING AND WAY OF DESIGN－ （アントニン・レーモンドの建築的アイデンティティの解読－建築家の思考方法と設計方法の研究－）
論文調査委員	（主査）教授 髙松　伸　教授 前田忠直　教授 門内輝行

論文内容の要旨

本論文は，チェコ生まれの建築家アントニン・レーモンド（1888-1976）の建築理論並びに建築作品に関する研究である。研究の目的は，レーモンドが日本で設計した住宅作品を対象として，レーモンドの「建築的アイデンティティ」（Architectural Identity）が，彼の「思考方法」（way of thinking）と「設計方法」（way of design），及び「両者の相互関連」の帰結であることを示すことにある。研究にはオリジナルの建築図面，写真，レーモンド自身が1935年から1967年に執筆した論考が用いられているが，これらの資料はかつて軽井沢にあったレーモンドのスタジオや東京の設計事務所が所有するものであり，それを著者が独自に収集し，レーモンドの住宅作品に関する一次資料のデータベースとして構築したものである。

本論文は5章，及び住宅作品のデータベースからなる。

第1章では，レーモンドに関する研究の意義を説明するとともに，論文の概要を提示している。レーモンドは様々なビルディングタイプの設計を行っているが，本論文は住宅作品に焦点を当て，東京で建築家として独立した1920年から第2次世界大戦前に日本を離れるまでの期間を対象とする。研究対象を住宅作品に限定した理由は下記の通りである。

1．レーモンドが「建築的アイデンティティ」を形成する上で重要な意味を持つ日本における最初の18年間のプロジェクトの大部分が，住宅作品であったこと。
2．小規模で私的な性格を持つ住宅作品は，建築家が自らの新しいアイデアを実験するのに適した媒体であり，それゆえに日本の近代建築の黎明期に重要な役割を果たしたこと。
3．日本の住宅建築の伝統が，近代建築家としてのレーモンドの思考方法や設計方法の形成に大きな影響を及ぼしたこと。
4．建築家の設計方法を分析する上で，住宅作品が最適な素材となること。建築家の思想と住宅作品には密接な関係があり，特にレーモンドの場合，最も興味深い住宅作品が自邸として設計されているために，そのことが当てはまる。

既往研究としては，日本では三沢浩が，アメリカではKurt G. HelfrichとKen T. Oshimaらが，レーモンドの生涯と建築について幅広く論じている。それに対し本論文は，レーモンドの思考方法や設計方法に含まれる創造過程をより深く解読しようとするものである。

第2章では，アントニン・レーモンドが育まれた背景を扱っている。本章の目的は，レーモンドの若き日々や，タリアセンでのフランク・ロイド・ライトとともに過ごした日々が，レーモンドの感性や知性をいかに形づくり，また日本との出会いを準備してきたかを明らかにすることにある。ボヘミア（現チェコ共和国）の小さな街Kladnoでその幼少期を過ごしたレーモンドは，歴史建造物に敬意を払う一方，それらが人々のライフスタイルと乖離していることに気付いていた。そして，プラハの建築文化遺産を深く敬愛しつつ，チェコのキュビストの運動に関心を抱き，さらに建築雑誌を通してフランク・ロ

イド・ライトの作品を発見し，未来を改善する手段として近代建築のあるべき姿を見出していたのである。

レーモンドの自然に対する気配りは，幼少期の祖父母の農園での体験の中で育まれたものであるが，本論文では，このことが，フランク・ロイド・ライトとの関係の理解やレーモンドの伝統的な日本建築の諸原理に対する理解にも大きく関係していると指摘している。

第3章では，レーモンドの「思考方法」を考察している。1935年から1964年にかけて執筆された随筆・講義・論文等の研究をふまえて，建築論（Architecturology）の観点から，レーモンドの建築的論述の教義的特性を明らかにしている。その中でレーモンドは，近代建築に関する議論において積極的な役割を果たし，日本での建築家としての経験をふまえて，日本の伝統建築の原理を近代建築に適用することを推奨しているのである。

また，レーモンドによる「建築家」の定義に注目し，「芸術家」，「エンジニア/マスター・ビルダー」，「先導者」としての建築家のあり方が提示されていることを指摘している。すなわち，「芸術家」としての建築家は，「美」の表現をめざすこと，「エンジニア/マスター・ビルダー」としての建築家は，美を最も経済的に実現するためにエンジニアの資質を合わせ持つ必要があること，「先導者」としての建築家は，他の建築家や社会の先駆者としての役割を担わなければならないことなどを明らかにしている。

第4章では，独自に収集した資料をもとに，レーモンドの「設計方法」を考察している。第1に，大正時代の日本の一般的な設計業務の実態とレーモンド事務所の設計活動について説明している。第2に，その間に設計された住宅作品を対象に，畳の使用法とそのプラン構成への影響を分析している。この調査を通して，ライフスタイルの変化に対するレーモンドの設計解と，それが1920年代から1930年前半の日本の住宅設計に及ぼした影響を明らかにしている。具体的には，レーモンドが畳をモジュールとして使用することにより，西欧建築と日本の伝統建築のシンセシスを行っていることを指摘している。第3に，レーモンドの軽井沢の自邸（1933年）における設計過程を分析し，彼の設計方法の本質が複雑なシンセシスを通して達成された西欧建築と日本建築の結合にあることや，レーモンドの美的価値や設計方法には数奇屋や民家の影響が認められることを明らかにしている。また，この作品がル・コルビュジェのErrazuris住宅をもとに設計されていること，そしてそのことは彼が近代建築の建築家の一人であることの表明であったことを指摘している。

第5章では，レーモンドの「思考方法」と「設計方法」の「関係」を探究している。具体的には，軽井沢の自邸に焦点を結び，レーモンドの「思考方法」をどのくらい写し出されているかを解読し，彼の「設計方法」と「思考方法」の関係に「一貫性」（coherence）のレベルが認められることを理論的に明らかにしている。すなわち，レーモンドの論考の分析を通して，彼の建築的論述の中に認められる数多くの概念を抽出し，これらの概念がいずれも「簡潔性」（Simplicity）という主導原理に関連していることを指摘している。

そして，「簡潔性」という点から軽井沢の自邸の住宅作品の再分析を行い，レーモンドが設計過程においてこの原理をどのように翻訳しているかを示すとともに，「簡潔性」という原理をより広い視点から近代建築運動がめざした概念と関連づけることにより，当時の歴史主義的権威に対抗するために強調された側面もあることを指摘している。

以上をふまえて，西欧と日本の総合をめざしたユニークな建築家アントニン・レーモンドの「建築的アイデンティティ」を規定する諸要因を総括し，「思考方法」，「設計方法」，及び両者の「関係」に関する考察をまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，チェコ生まれの建築家アントニン・レーモンド（1888-1976）の建築理論並びに建築作品に関する研究であり，特に1920年から1938年にかけて日本で設計した住宅作品を対象として，レーモンドの「建築的アイデンティティ」（Architectural Identity）が「思考方法」（way of thinking）と「設計方法」（way of design），及び両者の「関係」（relationship）の帰結であることを示すことを目的とする研究の成果をとりまとめたものである。

得られた主な成果は次の通りである。

1．建築理論並びに建築作品の研究において，建築家の「建築的アイデンティティ」を明らかにすることが重要な意義を持つこと，そして建築家とその作品との間に含まれる親密な関係から住宅作品を研究対象とすることが有効であることを指摘するとともに，レーモンドの住宅作品に関する一次資料（図面，写真，論考）のデータベースを構築した。

2．レーモンドが生まれ育った背景を考察し，彼の若き日々や，タリアセンでフランク・ロイド・ライトとともに過ごした日々が，レーモンドの感性や知性をいかに形づくり，また日本との出会いを準備してきたかを明らかにした。

3．レーモンドの随筆・講義・論文等の研究をふまえて，建築論（Architecturology）の観点から，彼の建築的論述の教義的特性を明らかにするとともに，レーモンドが「芸術家」,「エンジニア/マスター・ビルダー」,「先導者」としての「建築家」の定義を示していることを指摘し，レーモンドの「思考方法」を明らかにした。

4．日本の設計業務の実態とレーモンドの設計活動の調査，畳の使用法とそのプラン構成への影響の分析，及び軽井沢の自邸の設計過程の分析をふまえて，設計方法の本質が複雑なシンセシスを通して達成された西欧建築と日本建築の結合にあること，近代建築の流れをくんでいることなど，レーモンドの「設計方法」の特徴を明らかにした。

5．軽井沢の自邸に焦点を結び，建築作品及び建築設計におけるレーモンドの「思考方法」と「設計方法」の「関係」に「一貫性」（coherence）が認められること，そしてそれが「簡潔性」（Simplicity）という主導原理に関連していることを指摘した。

以上，本論文は，人間と自然の関係を重視し，西欧と日本の総合をめざしたユニークな建築家レーモンドの「建築的アイデンティティ」が「思考方法」,「設計方法」，及び両者の「関係」にあることを解明したものであり，学術上，建築学の発展に寄与するところが少なくない。よって，本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成20年２月27日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。